

氏名	澤崎 華子
ヨミガナ	サワサキ ハナコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第629号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 半透明の「かげ」－重層する時間の軌跡－ 〈作品〉 半透明のかげ 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	齋藤 典彦
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	宮北 千織
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

語ることは、出来事に対する自分自身の視点を主観から客観へと移すことで、初めて可能になる。作品群の根底に流れる自身と不可分なものについて語るのは、そういった意味で困難である。筆者の作品には、そのような曖昧さを含んだ事物が、曖昧さを保ったまま現実世界の景色に「透ける」ように現れる。そして、筆者にとっての制作行為とは、一つの視点で語れない事物を、制作過程で物理的に様々な形で表出させ、そこからの反照によってまた手を加え、徐々に浮かび上がらせる行為である。本論文は、そのような思考を背景とし、現在まで変容し続ける、筆者の制作についての論述である。

本論文では、筆者の作品コンセプトを「半透明のかげ」、表現方法と身体感覚の相関を「浸透と滲出 - 「染め」の皮膚感覚-」、イメージの現出方法を「レイヤー表現 -重層化する時間-」とし、筆者の制作意図について論じる。

筆者は、制作の契機となる自身の記憶や身近な風景に存在する現象を、「かげ」という言葉で表わし、自身の記憶との曖昧な距離感を、「かげ」を媒介とする表現によって模索してきた。そして、その「かげ」を、半透明なものとしての和紙に、時間の軌跡を留め置く表現手法によって表現している。

本論文における「かげ」の語は、現在一般的に使用される、光線を遮られた部分を意味する「陰」とは区別し、日本語の古語にも見られる、光によって生じる明るい像や暗い像を包括する意味で使用される。またこの「かげ」には、「面影」や「水影」など、実体を伴わないイメージのニュアンスも想定している。例えば「投影」という言葉にも使われる「影」は、実在するものとは異なる形で、周辺環境との関係を持つことができる。また影は周囲からの影響を受けやすく、その曖昧さは「弱さ」とも関連付けることができるが、同時にその「弱さ」と曖昧さゆえに、周囲との関係をより示唆に富む柔らかなものに変化させる可能性を秘めている。日常的にも光と影の境界が曖昧になると、花卉や葉、光、波、雨などの移ろいやすいものが、互いに緩やかな関係性を持ち始め、曖昧ながらも大きな存在として眼前に浮かび上がる。

本論文は3章で構成される。第1章「半透明のかげ」では、筆者の表現に通底するモチーフ選択の意図と、捉え方を示す。第1節「「かげ」への眼差し」では、筆者の「かげ」に関する原体験として、星の観察での

「そらし目」の体験と、日常風景に見られる影をとりあげる。また、日本の古語「かげ」を、筆者の制作上の文脈で解説する。第2節「「かげ」の表象」では、東西の芸術作品に見る影の様々な表現をとりあげ、筆者が表現しようとする「かげ」との共通点や差異を考察する。第3節「「かげ」の半透明性」では、「投影」される像との関係を踏まえ、「かげ」の可変的な透明度に着目する。それを「半透明性」と規定し、その視覚的、情緒的効果を検討する。

第2章「浸透と滲出 - 「しみ」「そめ」の皮膚感覚-」では、実制作における素材（和紙、岩絵具、水性絵具等）と「しみ」「そめ」の身体感覚の相関性を考察する。第1節「「しみ」「そめ」の皮膚感覚」では、物理的な「染み」と、日本語の「染め」という言葉の多義性に着目し、そこに含まれる心情的・身体的な感覚と、筆者の制作時の感覚との共通点について述べる。第2節「浸透によって出で来る景色」では、東洋画に見る裏彩色の技法によって、画面上で浸透と滲出が繰り返されることの意味を考察する。第3節「和紙の半透明性 - 出で来る軌跡」では、支持体としての和紙の半透明性を、物質的・歴史的背景から考察する。

第3章「提出作品「半透明のかげ」」では、主に提出作品について解説する。その前段として、第1節「レイヤー表現-重層する時間と色彩-」では、襲色目を半透明の色彩として引用し、自作品における「重ね」を解説する。第2節「重層する時間」では、レイヤー構造を時間の層と捉え、自作品でのイメージの立ち上がり方と素材論を展開する。時間の層の制作例として版画技法を挙げ、和紙や水性絵具等の画材と、レイヤー構造の点から、自作品との共通点や差異を考察する。また、都市の構造に関するセミ・ラティス構造を引用し、「出で来る」ものとしての風景論を述べる。第3節「中間帯に現れ出るもの」では、図と地の関係における中間帯や、言語における中間帯を説明する。第4節「提出作品解説」では、提出作品の主題、表現の意図、制作方法を、制作過程と共に示し、半透明なものとしての和紙に、時間の軌跡を留め置く現在の表現手法を説明する。

最後に制作の課題と展望を示し、結びとする。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、記憶や自然現象を“移ろいゆくもの”と考える筆者が、それらを「半透明」の「かげ」として表現しようとしている創作論である。

第1章「半透明の「かげ」」では、星を見る時に目標の対象をじっと見つめるより、少し周縁部を見た方が捉えやすい「そらし目」という観察方法について紹介。制作のイメージも同様に、焦点化することで見えなくなる事象を、通常の中心的モチーフより周縁的モチーフで描こうとしているとする。たとえば光や風を、小さな花や葉、波や雨で表す方法であり、この間接的表象を筆者は「かげ」としている。「曖昧にぼかされた対象を、より時間をかけて見つめることで、細部に宿るものが鑑賞者に働きかけてくる」のを、筆者は期待する。そして実体でも虚像でもないこの「かげ」を「半透明」のものとするために、和紙に裏側から照明を当てるといった表現上の工夫に言及している。

第2章「浸透と滲出 - 「しみ」「そめ」の皮膚感覚」では、和紙の半透明性の実例として、まず表面と裏が一体化する染色（紙、布）での「しみ」や「そめ」、それによって「出で来る」景色について考察する。次に絵画での裏彩色や、古文書で古紙を再使用したために筆跡が透き出た「漉返紙」「紙背文書」等に言及し、筆者の作品でも和紙に裏面からの工夫（裏彩色、照明等）を施すことで、「半透明」の「かげ」を生んでいることを述べる。

第3章「提出作品「半透明のかげ」」では、筆者の制作イメージとしてあるもう一点の問題、「時間と色彩の重層」について述べる。“一体”“混然”以外の“レイヤー”表現として、平安貴族が十二単衣などで重ねた色絹による重色表現「襲色目（かさねのいろめ）」に言及し、この方法を提出作品でも用いて、彩色した典具帖紙を重ねているとする。筆者には、自然に対する万葉歌人の「素朴で雄大な巨視的視点」より、平安貴族の繊細で「微視的な視点」への共感があるという。

本論文での論述は、論文タイトルにいう「半透明」の「かげ」をどのように表現するかという点で一貫している。ただ本文の所々で、むしろ筆者の強いモチベーションを窺わせる記述として現れるのは、明快な

主語・主体が、明確な輪郭や秩序で世界を一方的に語ることへの違和感である。「曖昧さ」への志向は、近年の博士論文のテーマでの重要な傾向の一つだが、論文を制作同様のイメージで作成しようとする場合、明快な論点や論証の回避というやっかいな状況になることがある。本論文の場合、そうした状況にはなっていないが、筆者が曖昧さをめざす理由やモチベーションが示されていないのは惜しまれる（「そらし目」の感）。しかし全体の論述は平易で読みやすく、事例の引用と解説も的確といえる。学位論文として十分な論考と判断され、審査会の承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

作者は、曖昧なものを曖昧さを保ったまま表現することを制作の根本としてきた。作者にとって制作とは、一つの視点で語れない物事を徐々に浮かび上がらせる行為だという。制作のきっかけとなるモチーフや現象を「かげ」という言葉で表し、その表現方法を模索してきた。

論文中で古語の「かげ」について述べている。「面影」「幻影」といった言葉を挙げ、日本語の「影」の様々な意味や、東洋絵画における陰影の考え方について述べている。実体を伴わないものの曖昧さが別の大きな存在に変化する感覚が制作の動機になっていることが理解できるし、興味深い。

2017年修了制作「気配」は、作者が考える「かげ」を平面作品として描き出した秀作である。画面中央の人物を含め、それぞれのモチーフの説明を極力省いておぼろげな存在として表現しており、具象絵画でありながら不思議な存在感を持つ。曖昧なものを曖昧なまま完成に近づけるのには非常に集中力を必要とするが、それに成功している。描く力のある作家である。

提出作品「半透明のかげ」は、計7枚のパネルが3つのパーツにより構成されている。道を歩いている中で目にした草花や、水面に投影された木の影、地平、カーテン越しの景色といった、作者が日常的に目にする移ろいゆく風景の断片である。過去に見た光景と、現在の作者を取り巻く光景が「かげ」の形で共存するイメージを、しみ・そめ・重ねといった技法で具現化した。従来からある技法を応用し、技法と精神性の合致を試みてきた。それが作者独自の新しいものとなりつつあり評価できる。

博士審査展では、会場の照明と、LEDライトの2種類の光源を用いた。順光と逆行の中間帯に現れるイメージの表現を試みたものである。画面裏からの光源にもう一工夫欲しい。

具体的なモチーフが描かれた画面左方から、右方に向かい物質そのものになってゆく変化を見せる狙いで、中央よりやや右方のパネルEにのみ裏から光を当てる展示としたが、パネルA・C・Gも裏からの照明可能なアクリル板を使用している。木枠上部の木枠を取り払い、上部からも照明を取り入れることで均等に柔らかな光を裏から当てる展示とした方が、鑑賞者に作者の意図が伝えられたのではないかと思う。また、アクリル板越しに透けて見える木枠やビスも作品内容に影響する部分であり、惜しい部分である。

審査会においては、提出作品が学位に相応しい優れたものであると評価され、審査員全員一致で合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者は「かげ」を、現在一般的に使用される光線を遮られた部分を意味する「陰」のみだけではなく、光による明るい像や暗い像を包括するものと規定する。そして、光と影の境界が曖昧になると、申請者が魅かれる花卉や光、雨など移ろいやすい事象が互いに緩やかな関係性を持ち始め、曖昧ながらも大きな存在として眼前に浮かび上がるとする。そして、申請者の制作を、そのような一つの視点で語れない事物を、制作過程で物理的に様々な形で表出させ、そこからの反照によってまた手を加え、徐々に浮かび上がらせる行為であるとしている。

論文はそのような申請者の制作行為について、第一章では「そらし目」という視覚体験や「かげ」という古語の多義性から作品のコンセプトを、第二章では表現方法と身体感覚の相関を「しみ」「そめ」の皮膚感覚から、第三章ではイメージの現出方法を、レイヤー表現を時間が重層化したものと捉えることなどにより論述している。「半透明」「かげ」という「曖昧さ」をテーマとしながらも、事例の引用は的確、解説も明快、

論述も平易で読みやすく、申請者の思考の鋭さを十分感じさせるものとなっている。しかしながら「曖昧さ」を一面的に定義し語ることへの違和感からか、概略的な論述にとどまっている感もある。作品に関してさらに具体的な論述や省察により「曖昧さ」への独自で深い洞察の提示がのぞまれよう。それを予感させる思考のきらめきがあるだけに一層惜しまれる。

一方、作品では様々な重層するイメージと時間が、薄い和紙やアクリル板、LEDライトなど種々の素材を組み合わせることにより現出させられ、従来の日本画表現とは異なった申請者自身の感覚の表出として魅力あるものとなり高く評価できる。ただ、それら物質的な存在が発するさまざまなシグナルが、それらの存在を強固に主張してしまっているようにも見える。単なる作品としての提示ではなく「半透明」「かげ」という「曖昧さ」の表象を試行するのであれば、事前の準備や展示形態への配慮などが一層必要であると思わせた。

以上のように論文、作品ともに欠点はあるものの美点がそれをはるかに上回っており、審査会において審査員全員が学位論文、作品として十分であると評価し、合格とした。